

平成25年12月 1日

飯舘村の実家に東電がやってきた 賠償評価の計測は驚きの数値、雨樋は計測不能

産経新聞 12月1日(日)13時40分配信



自宅を見る父と現地調査に訪れた東電の社員ら＝福島県飯舘村(写真：産経新聞)

急激に冷え込んだ11月下旬、東京電力福島第1原発の事故による賠償の現地評価のために福島県飯舘村の実家に、東電の社員らが訪れた。父と2人その現場に立ち会った。

東京電力が賠償金額を決めるには、定型評価、個別評価、現地評価の三通りの方法がある。定型評価は、家の固定資産税評価額に一定の係数を掛けて算出した金額を賠償するというもの。個別評価は家の建築時などの領収書見積書などに経過年数などを勘案した査定をするもの。そして現地評価は東電側の不動産鑑定士に直接自宅を見てもらい、査定金額を出してもらうものである。

この日は東電の社員2人と作業補助2人、補償コンサルタント2人の計6人が飯舘村の実家に訪れた。

賠償では、3つの方法から被災者にとって有利な方法を選べるとなっているが、現地評価を選ぶと2つの評価で出した金額を選択することはできなくなる。現地評価によって金額が下がったとしても、それを飲むしかない。

作業は主に補償コンサルタントの2人が自宅内の面積や寸法などを図り、特殊な材料や作りではないかを調査する。東電の社員はその監督で作業補助の2人は運転や線量の測定などを行った。

作業員はみな、白いブーツカバーを付けて自宅に上がった。担当の東電社員は父や私の質問一つ一つに丁寧に答えてくれた。

線量を測るシンチレーターを持参していたので、自宅周りを測ってくれるよう頼んだところ、驚きの数値が出た。父によると、事故直後、自宅付近で一番線量が高かったのは倉庫の雨樋の下で、1000マイクロシーベルト以上あったという。最近では100マイクロシーベルトまで下がっていたというが、今回は30マイクロシーベルトまでしか測れない装置だったため、計測は不可能だった。

さらに、母屋の玄関前の雨樋も30マイクロシーベルトを超え計測することができなかった。実家はまだ除染をしていないとは言え、ホットスポットが自宅の入り口にあるということの衝撃は大きかった。

実家は昭和36年に地区一帯が大きな火事に見舞われ、焼失した際に新築し、その後10年ごとに増改築してきた。古い部分はもう築50年にもなる。震災前、風呂と台所のリフォームを予定していたが、すべて帳消しになった。両親が楽しみにしていた新しい風呂は作れなくなり、今は避難先のアパートの狭い風呂に入っている。

自宅内も外も非常に寒い中、作業員らは丁寧に測って図面を作った。私も徐々に自宅内を隅々見て回った。いつもは実家に行っても居間と台所と洗面所くらいしか行かなかったが、改めて隅々を見回すと家の傷みや汚れがひどくなっていることに気づいた。クモの巣がそこら中であつた。父が一日置きに来て仏壇に線香を上げたり掃除をしているが、人が住まないことによって家は暗くじめつとした雰囲気になっていった。まったく帰ってないという人の家はどんなに変わっていることだろうと心配になった。

そして普段は気づかなかったが、私や兄弟、亡き祖父母の写真や賞状などを飾っていたことに目が行った。祖父の消防団の感謝状や小学校の皆勤賞などあまりにも小さな賞なのにもかかわらず、額縁に入れて丁寧に飾っていた。震災直前の平成23年1月に生まれた姪の写真も飾ってあつたが、23年8月からの写真はなかった。23年3月11日の事故の際に母親である妹とともに実家にいた姪はもう3歳になり歩いたり話したりしているが、あれから飯館村に来ることはない。両親が風呂や台所のリフォームを計画したのもお盆や正月に遊びに来てくれる孫達が快適に過ごせるようにという思いもあつた。

東電側が丁寧に自宅を見て測ってくれていることとは別に、住んでいた家には、金銭には換えることのできない思い出や歴史が刻まれていることを改めて実感した。ここで生き、繋いでいけると思ったものがすべて壊れてしまった。

感傷的になってしまったが、みなそうした気持ちを乗り越え、新たな家を購入したり、新たな一歩を踏み出しているのかと思うとやるせない気持ちがこみ上げてきた。

寒空の中、調査は約3時間に及んだ。調査結果を基に県内の不動産鑑定士が鑑定した後、金額を確定する。1～2カ月ほどかかるという。担当の社員は「東電の都合のいいように作ることはない」と話していた。父も「これだけ丁寧に測ってくれたらどんな結果になっても満足だ」と話していた。